野生と生きた90年

その 10： カナダの社会に飛び込む

高橋　清（29C応化）

全く予期しなかった、殊更の温情を受けた社長の突然のご他界、会社の急速の崩壊などが重なり、その全てをトロントの本社滞在中に知った僕はためらうこともなく帰路の飛行機の中で、完全退職し、カナダ市民としての残りの人生で何ができるかを考えた。帰宅の翌日、トロントの会社に電話で意向を伝えて辞表を提出し、すぐに気分転換を兼ねて妻と二人、愛する柴犬「ゴンタ」を連れてキャンプの旅に出た。あまり知られていない、数百キロの BC 州中部の森林地帯の小さなキャンプ場を訪れ、キャンプの支度をしていると、数個のテント区画しかない小さな公園には他にたった一組のキャンパーが居て、我々に、今まで 2 メートル角の大型の塵集積箱の上に大きな熊が来ていた、と教えてくれた。そこで安全を考えてテントは辞めて、日産―パスファインダーの車の中で一夜を過ごす事にし、夕方支度が終わって、ゴンタも一緒に車の中で夕食していると、恐らく昼に来ていたのと同じ熊がまたやって来て、その 2 メートル角のゴミ箱に入り込んで餌を探し、ゴンタの気の付かない間に 30 分くらいで満足して去っていった。僕たち久しぶりに自然を体感した。

企業社会からの脱出の気分転換もこの小旅行に依ってでき、真っ先に我が家の前にある Riverview Hospital というカナダでは最大級の精神病院でボランティアとして患者の世話をしてみようと申し込み、丸 1 日の仕事の説明を経て、週 2 日の仕事が決まった。当時ボランティアは約 30 人いた。個人的な仕事のおおよその説明として、1 日だけを費やしての仕事の内容紹介と、病院内の案内の後、いきなり翌日から仕事に入る。ボランティアに対するこの手順はカナダではごく当たり前で、最初の仕事は基礎的な内容で、徐々に体験によって知恵が生まれ、手順が進んで行くことを予期したやり方のようだ。精神病患者の扱いは非常に難しいことは予期通り、しかし患者のレベルは広く、平常な毎日では気が付かないほど正常と思える人が予想外に多く、異常があれば医師による対策がその都度講じられ、その必要のない安定した病状の人がボランティア―と接触することで、患者が平安で正常な日を過ごせる、というのが当時の方策であった。特に精神病患者にとっては同一或いは類似の人種をより平静に受け入れる傾向があるということもここで知ったが、僕はアジア系の患者を扱う事で仕事が始まった。

最初に担当した患者は、幸いな事にカナダ生まれの同年輩の日本人、日本語も少しできるが本人は英語を望むのでそれに対応し、一日の仕事は、朝食後病室で面会、それから天気が良ければ野外に連れ出し、できるだけ本人の好きなように歩き回らせ、病院内の食堂で昼食、その間、木の葉、虫、鳥、気の種類など、本人が気がつくことを探して、ごく基本的な事を説明する。雨天の時は病室内で写真を見たり、本を読んだり、大きな病院内を歩いて過ごす。それが役に立つか立たないかは問題では無く、ただそうやって会話を続ける事で、徐々に本人と意思が通じてくればいい、という考えだ。何週間か過ぎたころ、インド系の患者も日替わりで相手をする事になったが、彼は中程度の症状で、感情の上下が大きく、かなり困難な患者だった。どこを歩いていても、話し掛けは受け入れず、自分で言いたいことを言うだけ、一度は道を間違えたので、そちらは行き止まりだ、と注意するとすっかり怒って殴られそうになった事もある。実はそのような患者の方がかなり多く、最初に会えた日本人の様な患者は稀であった。そのような予期できない変化が多い患者の症状に対処する難しさは、丸一年も仕事をして、数人の患者の面倒を見るようになるとようやく慣れ、気持ちの上の対応ができる様になった。

まもなく野生関係のボランティアも同時に始める事になったが、精神病院の仕事は僕の人生にとっては 2 度とできない貴重な体験で、あっという間に時が経ち、5 年間のボランティアの証書を受け取った。ボランティア活動の最初にして最後の記録である。

僕は幸い精神病を経験したことが無いので、これは全く未知の世界だった。精神病は一時的な気分の変動ではなく、その病状は日々上下を繰り返す。その過酷な変化に対応するには相当の気分転換が必要だった。日々の仕事の後での自分の精神状態はかなり厳しかった。病院から坂を上った上に我が家がある。僕は仕事の葛藤を我が家に持ち込みたく無かったので、いつも帰路、病院施設を抜けた自然地の中の、直径 3 メートルほどの大岩のあるところで、腰を下ろしたり、時には仰向けに寝そべって空を見上げたり、30 分ほど鳥の声を聞いて気分転換を図った。近くに大きなドングリの木があった。ある日仕事を終えて、その岩のある所まで来ると、そこに一羽の大きな「Raven（レーブン）」と呼ぶ

カラス（日本のカラスでは「ハシブトカラス」或いは「ミヤマガラス」に類似した、普通より一回り大型のカラス）が来て、ドングリの実を咥えていた。そのレーブンは実をアスファルトの道の上に落として、殻を割ろうとしていた。しかしアスファルトは若干柔らかく、簡単にドングリを割ることができない。

僕はレーブンに、「この岩の上に落としてごらん」と言って、岩の上に登るのを避けて道の脇に立ったが、聞こえなかったらしい。そこに駐車場から、車が一台通りかかった。近くの灌木に停まっていた彼（レーブン）は、何を思ったか道に降り、胡桃の実を道の真ん中に置いて飛び去った。僕は「馬鹿だなー、車に轢かれるぞ」と言って、ハッと気がついた。彼は車につぶして貰おうとしているのだ。今更ながら、レーブンの賢さに驚きながら、「そこでは車が轢けないよ」と言うか言わざるかにまた、車が一台通った、勿論胡桃には触れもせず。それを見た彼は、直ぐに飛び降りて胡桃を咥え、道の端に運んで置いた。また車が来た。見事に胡桃は割られ、辺りに散った白い実を彼は嬉しそうに、「ほら見ろ」とでもいう様に時々チラッと僕を見ながら綺麗に食べ切ってそこを去っていった。

この出来事は僕に、まったく別の野生の観察法を教えてくれた。それまでは、カラスは野鳥というよりは人の住むところに介在して、餌を漁り、勝手に住処を造ってわがままに暮らすやかましい鳥、という印象があったが、実は彼らは野生界の生き物の中でも名立たる知恵者である事が分かってきた。僕が 90 才を越した今現在、我が家の坂の上の森の中にレーブン家族が居て、去年は 3 羽の子を産んで、秋に家の前まで来てしきりにさえずっていた。じさまの家を知っているぞ、という態度で、やがて母親とみられる大きいレーブンが前にある80メートル近いベイマツ（Douglas Fir）の最頂点から、眺めていた僕の立って居る我が家の正面に真っ逆さまに飛び下り、10 メートルから急に翼を広げて逆さ返りをして去っていった。ほとんど毎週のように彼らの声を聴く度に、僕はあの 30 年前に逢ったレーブンの家族であることをいつも確信している。同類であっても、カラスとレーブンとはその性格や生態が異なり、カラスは種族が一つに終結して団体生活をするのに比べ、レーブンは家族単位の個体で生き、猛禽類としての強い性格を持つ。時にカラスの群れに攻撃を受けることもあるが、その出来事を精密に観測すると、多くの場合は表面的な争いにとどまり、時にはお互いに遊んでいるとしか思えない交錯の仕方を見せるものである。（続く）

リバービュー病院、主病棟とその周囲

病院周辺の木立

Raven の焼き鏝絵

Raven の横顔
嘴の大きさと形がカラスと異なる